

## 甲子夜話

『甲子夜話』は、文政四年（一八二一年）十一月十七日から天保十二年（一八四一年）に及ぶ肥前国平戸藩第九代藩主の松浦清（号・静山）の随筆集。正篇百卷、続篇百卷、第三篇七十八卷に及ぶ大部のもので、この期の政治、社会事象、風俗、伝承等が網羅されている。かつては坂田勝氏の『甲子夜話総目録・検索補註』が頼りであったろうが、現在では「ジャパンナレッジ」で全文検索まで出来る時代となった。ジャパンナレッジは会員制であるが、「甲子夜話」全文検索及び平戸藩楽歳堂蔵書目録データベースを用いれば、ネット上で誰でも検索できる。「戸隠」の語句を検索して、得られたのは次の四項目である。

1 東洋文庫 333 『甲子夜話 4』正編卷五十四（中村幸彦・中

野三敏編纂）に収められた『駿番雜記』は、松浦分家の和州が駿城の加番を任じられた時に、駿府での一行の者が見聞した異聞を手紙で静山に知らせたものをまと

めたもので、そのひとつに（75、76頁）、駿河の安倍郡の腰越村の人が隣村の坂本村の間の雪道で、

足痕の大きばかり三尺計あるを見る。不思議におもひ其先きを見れば、また痕あり。其間九尺ほどづゝにて行々絶ず。三里程の道に痕つゞきて、枝道にもふみ通りし痕あり。又腰越村の手前に小川あり。此川を一股に渡りしと覚しく、其川向二三間にも足痕ありしと。これを山男と謂ひ、稀には其糞を見当ることあるに、鈴竹と云竹葉を食とするゆゑ、糞中に竹葉ありと云。但し右の村々は大井川の水元の辺なりと。府の江川町三諧屋ハヤ仁右衛門咄したり

とある。これに付された割注に戸隠の名があり、  
○信州戸隠辺にても、大雨の後、山中の畑など杯ばかりに三尺計の足跡あるを度々見る由し、先年九頭竜権現へ参詣のとき、其地の農夫より承る。

とある。割注はさらに豊後国の高田の大きな山男の話に続くが、大男といえは柳田国男の『ダイダラ坊の足跡』に「戸隠参詣の道では飯綱山の荷負池が、中稜漫録にも出て居て既に有名であつた。」とある。現在は地元ではそ

の足跡が大座法師池だともいう。『甲子夜話』にいう「信州戸隠辺」は飯縄でよろしかろうとも思うのだが、『中稜漫録』に「飯綱山の荷負池」の記載があつたか不安ではある。なお、腰越村の人の話は大井川の水元の村となつているが、藁科川中流域に「ダイラボウ」の山名がある。

## 2

東洋文庫『甲子夜話6』正編卷九十（中村幸彦・中野三敏編纂）の167、168頁。

戸隠は奥院に本地として聖観音を、その権現として手力雄命を祭ってきたが、信仰の中心は地主神とされる九頭龍で、その霊験談は多くある。一方で、観音の霊験談は、法燈国師の母が観音に祈って法燈国師を得たとされるものがある。ただ、信州の筑北の坂北にある岩殿寺を戸蔵山といったが、「蔵」を「隠す」とも読むことから岩殿寺の戸蔵山が戸隠山になったとも思われ、戸隠の観音の霊験は心許ない点もある。手力雄命の霊験談ともなると皆無といってもよいのだが、『甲子夜話』のここにそ

のひとつ見いだすことになる。きわめて貴重な逸話である。

「二」 丙戌の晩秋、某氏より糝糖を贈る。信州より出す所と。淡緑色にして、育鳳鸞と銘ぜり。云ふ。竹実を以て製すと。記文を添ふ。曰。

君か代は万民ゆたかに過るといへども、風雨和順ならざる時は、耕作かならずみのり、みのらざる事侍り。しかるにある時忽然と童子一人あらはれ、我はいにしへ天の岩戸を開き給へる神のつかはしめなり、去年の秋たなつものみのらず、世なみいとしづかならず、神もなげかはしく思し給へるのあまり、此やまに食物を得さすべしとの神勅なり。かならず是を食さばもろくのやまひをさり、身心安穩なるべしと告給ふと覚て、夢はさめにけり。社僧奇異の思ひをなし、いにしへの世には木かやに糯子(糯子、だし、もちごめなり)欄外注記。以下同)のなりし事侍りとかや。今はたかゝる御告を蒙る事、まさしく豊年のしるしならむかと、此事人々に告しらすに、やがて夏のころより山谷のみすゞ(すゞは篠也、みすゞかる信濃は、みすゞかる篠とつづけたる枕詞也。都て信濃に

は大なる竹無くして、篠の類矢竹のみあるといふ。実をむすぶ事おびたしく、みな人打つどひ、是をひろひあつむるに、日々に両三俵を得たり。あらかじめ是を数へたらむに、凡五六方に過し。是まつたく戸隠の神の恵ならんこと尊ふべし。

邦守

戸隠のみすゞの竹になれる実は

ふりにし神のめぐみなるらむ

右竹実をもて製し侍る御菓子なり。則戸隠山の御供を御戴被<sup>レ</sup>成候にひとしく御坐候間、宜御披露可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候。以上。

みすゞかる信濃国、いもゐの里、白雪斎製

信州善光寺西町、御菓子所 府野屋清吉

この記文は贈り主が付したのではなく、贈られた糝糖に添えられてあつたものであろう。

- 3 東洋文庫『甲子夜話続編5』巻六十二（中村幸彦・中野三敏編纂）の201頁。

橘南線の『東遊記後編』（寛政九年（1797年）刊）に「名

山論」として「山の高きもの富士を第一とす」として二十五の山名があげられているが、それに浅間山、大山、妙義山の三山を加えた二十八の山が、『甲子夜話』巻六十二に「山之高者」としてあげられている。山の順序も『東遊記後編』と一致する。なお、この部分は蒲生亮秀の『墨多筆記』から『甲子夜話』に採録した部分である。

○山之高者、富士為第一。其次浅間山、其次加賀白山、其次越中立山、其次日向霧嶋山、肥前雲仙嶽、信濃駒嶽、出羽鳥海山、月山、奥州岩城山、岩鷲山、伯伯耆大山、其次豊前彦山、肥後阿蘇山、久住山、豊後姥嶽、薩摩海門嶽、伊予高峰、上野妙義山、美濃恵那嶽、御嶽、江州伊吹山、越後妙高山、信濃戸隠山、甲斐地蔵嶽、常陸筑波山、奥州幸田山、御駒嶽、其他不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>挙<sub>一</sub>。蝦夷涌宇辺都山、亦高云。

4 東洋文庫『甲子夜話三編2』巻二十二（中村幸彦・中

野三敏編纂）の155、156頁。

次話は社人が銃で撃ち殺した戸隠の巨猫の話である。

『譚海』卷二には「○信州戸隠明神の奥の院は、大蛇にてましますよし、(中略)又立願の人戸隠に参詣すれば、梨を献ずるなり、神主を頼て奉納するに、神主梨を折敷にのせ、うしろ手に捧げ跡しざりの様にして奥の院の岩窟の前にさし置き歸る、うしろをかへりみず、神主岩窟を十間もさらざるに、まさしくなしのみを喫する音きこゆと云、恐ろしき事也」とあり、巖窟において供物を食すのは通常は大蛇の九頭龍ということになっていて次の羽林が語る話は巨猫となっているのが特異である。

〔一〕或日宮原羽林を訪しとき、羽林の話れるは、信州戸隠の神は、甚威靈ありて、詣人物を供ずるときは、神出でゝこれを喰ふ。されども昔よりこれを視ることを禁じて、人見ることなし。然れども其物を喰ふ声ありて、殊に高く、能く人耳に聞ふ。斯くすること久し。又彼の社人に、性剛強なる者あり。曰ふ。若し神もならば、其物を喰ふ、嗜たしなんでその苾芬を食はん。然るに人を忌で頭れ食ふ。想ふに神に非じと。或と

き潜に烏銃を携へ、夜往て窺見るに、果して神出て供物を喰ふ。社人即銃を發してこれを打つに、中りしと覺しく、神隱る。社人次で其処に到るに、巖穴あり。尋で入るに、一町許にして空明なり。よく見れば両山の間に出づ。向を視るに、前山に又穴あり。且血痕を連て其穴に及ぶ。社人思ふ。果して妖物ならんと。穴口より其奥を窺へば、真鍮の光有るもの並び見ゆ。これ其ものならんと、再び銃を發するに、又中て其物斃るゝを覺ふ。迺其処に往き視るに、年歴たる巨猫にして、銃の為に死したり。さきに鍮光と見へしは猫の両眼なりしと。人以てこの社人の敢進に伏し、その勇氣を賞せりと。予因て思ふ。嚮に江川が話せし、豆山に貉を喰るし猫も、この信州の古猫の比ならん。

追て曰。『三才図会』云。信州戸隠、祭神手力雄命、押二開天磐戸一抛レ之。其磐戸落ニ于此ニ云。常陸、志津社亦同躰。又云。同所に九頭竜権現あり。伝日。神形九頭、而在ニ岩窟内一。以レ梨為ニ神供一。毎夜丑刻、未<sup>イマダ</sup>春米三升供レ之。疑此当山地主神乎。為ニ神秘一。別当天台、三年苦行勤レ之、又歴ニ三

年「交代」<sup>ッ</sup>と。これ等に扱れば、彼の岩窟の内には、何物か棲と見へたり。若し巨猫の話然らば、今は九頭竜の事は熄<sup>やみ</sup>しならん。猫と竜とは別物か。禹貢の鳥鼠同穴の如き者か。喝。

九頭龍を巨猫に置き換え、社人（実態は山籠と称される若年の僧。『三才図会』に別当とあるのも誤）が銃を撃つなどと随分と物語めいている。『太平記』で源満中が鬼を斬り、能の『紅葉狩』でも維茂が女に化けた鬼神を退治したから、戸隠山が鬼の本場ともなり、戸隠山と怪物が結びつけられるのは仕方がない。九頭龍自体が九つの龍の頭を持つ蛇であるから、怪物であることは間違いない。洞窟ではないが、『本草綱目啓蒙』では「千歳蝮詳ナラズ信州戸隠山ハ高クシテ雪深ク六月ニ非レバ登ルベカラズト云ソノ神社ヨリ奥ニ三十餘抱ノ珍ラシキ大松アレトモ六月比ハヤマカゞシト呼ブ毒蛇アリテ人ヲ害スルヲ畏レテ登リ見ル人稀ナリソノ蛇ハ四足アリテ石龍子<sup>トカケ</sup>ノ形ニ似タリ人聲ヲ聞ケバ後足ノミニシテ立テ人ノ來ルヲ待ツ」と、四本足の蛇が登場させられる。

まったくの物語となれば、戯作の「信州戸隠御擁護奇談」  
には、形はむささびに似て左右の翼一丈総身に針の如き  
毛のある眼三つの化鳥さへ登場する。